

汎用性の高い英語で行われるセゲド大医学部の授業＝ハンガリー



医の道志し ハンガリーへ

日本人医学生は海外留学など東欧諸国を中心に近頃はハンガリーだけでなく年広がりを見せている。チェコやポーランド、医学の世界でも汎用性の



ハンガリーの首都ブダペスト

高い英語で授業を行う大英が多いためだ。

ハンガリーでは約二十年前からセンメルweis大と、南部にあるセゲド大、ペーチ大の国立三大学が英語コースを設置。医学部は六年制で、事前に一年間の予備コースで英語のほか、生物など理系科目を学んでから進むこともできる。

学費は年間百数十万円で日本の国立大医学部より多少割高だが、生活費は格安。入学に際し、医師という職業への熱意が重視される。日本ほど入試難易度は高くないが、入学後の進級は簡単ではない。

ハンガリーでは自国民は授業料が無料で、各大学とも留学生を対象とする英語やドイツ語のコースで得た授業料を大病院の設備投資などに回している。留学生の出身国話している。

ハンガリー共和国 欧州のほぼ中央に位置する共和制国家。人口は約1000万人で、国土は日本の約4分の1。首都はブダペスト。伝統的に理数系の教育に強く、医学教育もレベルが高い。ノーベル賞受賞者の人口に占める割合は世界一。

はドイツ、ノルウェー、イスラエルなど広範囲に及び、セゲド大では授業料収入が年間予算の三分の一に上るといふ。

ハンガリーで取得した医師免許は欧州連合(EU)二十七カ国で通用するが、日本で医師として働くには日本の医師国家試験に合格することが必要。その場合、厚生労働省が「大学の成績が良好であるかどうか」を個別に審査し、受験資格を判断する。

早ければ二〇一二年にも日本人の卒業生が出る予定だが、入学の受け付けや医学生を支援している民間事業者「ハンガリー医科大学事務局」(東京都新宿区)は「ハンガリーの医学部を卒業するのは日本よりも難しい。中途半端な心構えでは授業についていけない」と話している。

ハンガリーの三つの国立大医学部は、世界約二十カ国から学生を受け入れている。授業はすべて英語。三年前から日本人にも門戸が開かれ、現在、約八十人が学ぶ。特徴は日本の国立大と比べてもそれほど高くない学費と「医師になりたい」という熱意重視の入学者選抜。閉塞感漂う日本の医療界を尻目に、一度は医の道をあきらめかけた若者たちが海を渡り、世界各国の学生と切磋琢磨している。

(ブダペスト共同＝名古谷隆彦)

周囲は年下の学生ばかり。でも自分のような回り道をした人間の方が、よりよい医師になれるという自負がある。

各国の学生が集う英語コース約百五十人の中で、成績はトップクラス。薬剤師で得た知識と経験が生きているという。

やって来るまではまったく知らない国だったハンガリー。時間はゆつたりと流れるが、夜中の一時ごろまで勉強し、朝七時に起きる生活が続く。日本で見えてきたのは医師不足の町。将来はプライマリケア(初期診療)に取り組むのが夢だ。

佐藤英之さん(30)



セゲド大学で授業を受ける佐藤英之さん

薬剤師の経験が糧に

薬剤師をしながら、趣味を薬しむ生き方をしようと思っていた。だが医療現場を間近で見ると、うちにさまざまな疑問を感じ、「どうして医師の道に」と思うようになった。

ハンガリー南部にあるセゲド大学の医学部二年生の佐藤英之さん(30)＝埼玉県出身＝は、四年間の薬剤師経験を経て、医学生になった。

社会人として初の勤務は鹿児島県の田舎町。小児科クリニックの尊敬できる医師がいたが、患者の話をきちんと聞けないよう

うな人にも出会った。もともと医師になる気はなかったのに、四年間の体験が自分を変えた。しかし、日本の医学部は仕事をしながら受験するには狭き門だった。受かる保証もなく受験勉強を続けるより、海外の医学部を目指す方が現実的だと考えた。セゲド大では一年間予備コースで英語と理系科目を学び、医学部に進んだ。

沼田るり子さん(28)



大英を子集るるりさんが集るるりさん

祖母の死契機 再挑戦

目の前で祖母の命が燃え尽きようとしていた。心拍数を示すモニターの数値が徐々に下がっていく。「もう逝くんだな」。最後に大きく息を吐き出した祖母は、そのまま安らかに眠った。九十二歳だった。最期の瞬間を目に焼き付けた。

ブダペストにあるセンメルweis大学医学部二年の沼田るり子さん(28)＝茨城県出身＝は、農業を営む母方の祖父母と同居しながら育った。母は実家に縛り付けられる生活が嫌で、祖母とはいつしか疎遠になっていた。

死の前日、祖母の枕元で母が予想もしなかった言葉を口にした。「お母さん、愛しているよ」。二人は気持ちを通じ合っていないとばかり思っていた。祖母の目から涙がこぼれ落ちるのを見て、人間という存在がたまたまなくおしく思えた。

当時、筑波大の四年生。対人関係がうまくいかず、家に引きこもっていた時期だった。そんな自分に祖母は最後まで生き抜く姿を見せてくれた。

「のりちゃんが大学に行くためだから」。市場に作物を売りに行き、こ

つこつお金をためてくれた祖母。医師になることをすつと楽しみにしてくれていた。大学進学時に一度はあきらめた道に、再び挑戦してみようと思いに決めた。

偶然目にした新聞記事で、ハンガリーの医学部が日本人の学生を募集していることを知った。学費も日本の国立大程度なのが魅力だった。米国がリードする現代医学の世界。英語で学ぶことの利点は大きいと思った。

世界各国から学生が集う英語コースは、ストリートで卒業できるのが半数程度。ここには何となく医学部に来てしまったという人はいない。

大学の授業が終わると、日本人の学生が集まるブダペストのスタディールーム(自習室)で先輩たちの指導もこなす。引込み思案だった自分には、もうどこかへ行ってしまった。

熱意重視の入学者選抜 日本人学生続々と